『抵抗の新聞人　桐生悠々』

『世界』11 月号の青木理「読書の要諦―ノンフィクション」を抜粋して紹介する。作家・井出孫六さんの名著『抵抗の新聞人　桐生悠々』がこの 9 月、岩波現代文庫版として新たに刊行された。軍部ファッショの暴風が吹き荒れた戦前戦中の暗い時代、暴風に敢然と対峙しつづけた反骨の新聞人・桐生悠々。その生涯を鮮やかに描いた本作は、人物評伝の古典ともいうべきノンフィクションである。

石川県を本拠とするテレビ局・北陸朝日放送は 2018 年、「言わねばならないこと―新聞人・桐生悠々の警鐘」と題するドキュメンタリーを製作し、第 1 回の「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」を受けている。このドキュメンタリーを制作した同局の記者・黒崎正己さんは、作品内容などを活字化した『新聞記者・桐生悠々　忖度ニッポンを「噛う」』(2019 年、現代書館)で、なぜこの時期につくったのかに触れ、2017 年に各地で行われた〝ミサイル避難訓練〟がきっかけになったと回顧し、こう書いている。

〈ミサイル訓練だけではない。特定秘密保護法、安保関連法、共謀罪法と続いた治安立法、森友加計学園問題で露わになった公文書の改ざんと隠蔽。そして、忖度ともの言えぬ空気。/抵抗するものは排除し、安全を理由に自由を規制し、情報を隠蔽する光景は悠々が生きた時代と二重写しに見えた。(略)今、私が悠々を描かなければいけない理由はそこにあった〉

今般新たに編まれた岩波現代文庫版には、悠々の五男だった故・桐生昭男さんの一文も特別付録として収められている。そのなかで昭男さんは、父の仕事を次のように評価している。〈戦後も大分経てから、父のことを《異色の反戦ジャーナリスト》として、美談の主でもあるかのように紹介されたことがあった。たが、そうした側面からのみ父を眺めると、人間像ばかりか、時代の歴史すらも不透明なものになってしまうのではないかと危惧するのである。父を《反戦ジャーナリスト》たらしめたのは、むしろ《時代のゆがみ》がそうさせたのであって、本質は自己欺瞞が許容できなかった人間臭の芬々とした一言論人であったという事実を、声を大にして証言したいのである〉

極めて重要な分析であり指摘だと思う。すなわち悠々の本質が「自己欺瞞を許容できない一言論人」であったなら、ファッショの嵐が吹き荒れた時代とはいえ、他の言論人はほぼ全員が目と耳と口を塞ぎ、「自己欺瞞」のなかに逃げ込んでしまったことを意味する。また、悠々を「反戦ジャーナリスト」たらしめたのが「時代のゆがみ」だったなら、果たして現在はどうか、メディア人として現在を生きるお前は大丈夫か、という疑問を私たちは常に胸に抱いておかねばならない。政治や社会の軸が大きく歪み、本来あるべき位置とズレてしまったと多くの人びとが首を捻り、なのにジャーナリズムが果敢な抵抗を試みていないと感じられているからこそ、かつて嵐の世でも泣き続けた抵抗の新聞人に人びとの関心が寄せられているのではないか、と。

(2021 年 11 月 9 日)